慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二七三号）

目次

懺悔録（六）—阿闍世の懺悔……近角常観……(1)
二河白道の歩み……福島政雄……(9)
一道会の記（一）……榊原徳草……(13)
念仏詩抄……木村無相……(19)
如来出世の本一意……花田正夫……(21)

第二十四巻　第二号

懺悔録（六）

近角常観

阿闍世王の懺悔（一）

王の前に最後に彼の有名なギバ大臣がおうかがい申して、色々と慰めて、遂に仏教に帰して真実の安立を得させられた。そのことをこれから申し述べますから、よく心をとめて味おうていただきたい。

ギバ大臣は先ず優しい親切な言葉をもっておたずね申すよう「大王、如何です。お眠り遊ばすことが出来まするか」と。これにこたえて阿闍世王の云われるには、

「ギバよ、余は今まことに重病である。正法の父王に対して悪心をもって暴逆を加え奉ったのだから、これはどんな良薬でも、ご祈祷でも、どのような看護人があってもとても癒るものでない。余は以前に智者の教に聞いたことである。身も意も口も、この三っもし清浄でないならば、この人は必ず地獄より外に行き場がないと思えと。余は今正しくそれである。どうして安穏に眠ることが出来ようか。今余がために無上の医者がない。何とかして余が病を癒す良い薬があるまいか。この苦しみを救うてくれる道はないだろうか」と。

これを聞いたギバ大臣は腹一杯の同情をもって王を讃め「それは如何にも結構な御心でござる。大王、諸仏世尊の常の御教化には、二っの善きことがあって能く衆生を救うことである。先ず一には慚二には愧である。慚というも愧というも、どちらも「ハジ」という字であるが、慚とは自分で罪を造らぬこと、愧とは他に罪を造らせぬこと。また慚とは自分の心に恥じることで、愧とは打ち明けて他に訴えること。また慚とは他の手前を思うてつつしむこと、愧とは神仏の冥見（めようけん）に恐れ入ること。この慚愧の念の無い者は人とは云われぬ、それは畜生であります。慚愧の心があるので能く父母もしくば師匠、そのほか目上の人を尊び敬うのである。慚愧の心があるので父母の有難さもわかり、兄弟の親しみも心に浸みわたる。今、大王は心から慚愧していられます、実

1.
2.
3.

に結構なことでございますが如何にも仰せの通り、その病をいやす者は外にありますまい。唯カビラ城の浄飯王シッタルタ太子は、別に師匠とてはなく独りでおさとりなされて、無上菩提を得たもうた仏陀であります。世界中にならびのない勝れた方であります。金剛の如き智慧をもって、能く衆生一切の罪悪を打ち砕いて下されます。苦しみがなおらぬなどという心配は少しもいりません」と。

かように話をしている中に虚空の中に何者とも知れず、声ばかりあって、大王に告げて云うよう

「世尊は久しからずして涅槃に入りたもうから、早々仏陀世尊の所へ往ってお救いを蒙れ。仏陀世尊の外には助けて下さる方はない。我は今お前を不愍と思う故すすめ導くのじや」と。

大王はこの語を聞いて恐ろしく感じて五体震動して芭蕉樹の如く、ふるい上って天に向って尋ねた。

「雲の上でそう仰せあるは、どなたで御座る。お姿も見えず、お声ばかりであるとは」

と、申すに

「我はこれ汝が父ビンバシャラじや。お前は疾く〳〵ギバの言葉にしたがえ。邪見の輩、六臣の勧めについてはならぬ」

この父の親切の言葉を聞いて阿闍世はいよいよ心苦しくてたまらなくなって、気絶して倒れてしまったが、体中の瘡（かさ）が一層はげしく熱し痛み、その臭いこと非常である。冷やし薬をばどのように塗っても、唯ますますひどくなる計りであった。

此時、仏世尊はギシャクツ山に在しまして、月愛三昧（ぐわつあいざんまい）という定に入らせられて、定中から大光明をお放ち遊ばした。その御光りが如何にも清らかに涼しくあるのが、遙かに阿闍世王の身体をお照らしになると、そのような劇しい全身の瘡が一時にスッカリと癒ってしまった。そこでギバが王に

「あの方は天中の天であります」

と申すと、王は、

「どうしたことでかような御光明をお放ちなさるのであるか」

と尋ねられたので、ギバが申すには

「されば今この瑞相（ずいそう）は恐らくは大王の為めにわざわざお放ちなされたかと存じます。大王は先刻、世の中に我病をいやしてくれる名医がないとお歎きでありましたが、仏世尊がこの光明をもってまず大王のお身体を療治し奉って、御身体の御平癒になったうえで、お心の方におよぼうと思召すのでありましょう」

と申しあげた。これを聞いて大王が余程心を動かされて
「そんなら、如来世尊にも、この我身に遇うてやろうと思召すであろうか」
と仰言ったのでギバは
「如何にも左様であります。世間の親でも多勢の子供を愛するに、何れにへだてはないけれど、其中でも病気で苦しんでいる子の方に心が重くかかるようなもので、大王よ、如来もまた左様であります。一切の衆生の上に依怙（えこ）も贔負（ひいき）も無けれども、罪ある者をことに御案じなされて、身のおさまりのついている者よりは、放逸のものをば束の間もお忘れ下さりませぬ。大王、この瑞相はこれは如来世尊が月愛三昧に入ってお放ちなされるお光りであります」
すると王は、
「月愛三昧とはどういうことぞ」
お尋ねになりましたので、ギバが申すには
「たとえば彼の月輪の光りは能く一切のウパラ華を見事に開かしむる如く、月愛三昧もまた能く衆生の信心の花を開かしむ。また月東山にのぼるときは、旅行の者も心はなはだ喜ぶが如く、月愛三昧は、信仰の路をたどる者に、大歓喜を生ぜしむる故に、月愛三昧と名づくるのであります」と申し上げた。

実に阿闍世王が、仏のお力で、スッカリ病気を癒して頂いたと云うことは、徒らに聞き流してはならぬ。前に私自身が懺悔した通り、私は煩悶の極、遂に身体に非常の痛みを生じて、終日終夜大悩乱におちいりました。しかるに不思議にも、僅か二週間のうちに、あだかも掻き消す如く病気が本復したのは、決して偶然ではなかった。私は病気が本復してのち、数日を経て、終に偉大なる仏陀慈愛の光明に摂取さるにいたった。ギバが、如来に大王の身を療治して、しかして心に及ぼす思召であると云われた言葉は、実に私の境遇を、そのまま直写されたような心持がする。世の中には、甚だしき病気にかかりて、幸に本復した人も少なくないであろう。勿論人生の方面より云えば、医薬その効を奏したとも云われようが、これを霊界の方面より眺めれば、慈愛の仏陀が、心を救わんとて、先ず肉体から救うて下さったのである、ということを忘れてはならぬ。実にこの月愛三昧の光なるもの、身心を歓喜せしむる慈悲の光明である。

かく仏陀の光明の導きと、ギバの忠告とによって、阿闍世王が、はじめて仏を慕いたてまつる心を起した時、仏陀ははるかにこの様子を御覧遊ばして、大衆に告げて仰せらるるには
「一切の衆生、無上大道に進む因縁のためには、善き友

人に越したものはない。なぜならば阿闍世王がもしギバの言葉に従わなかったならば、来月の七日には必定、命が終って無間地獄におつる、もうその日がせまっている。してみると誰人も早く善知識に従うにしくはないぞ」
と、求道に善知識の大切なことをおさとしあらせられた
さて阿闍世王はいよ〳〵仏世尊のみもとに参らんとて出掛けられた。途中に誰ともなしに語ることを聞くに、シャバダイ国のビルリ王は、如来世尊が不憫や彼は逆罪を造つたでやがて火のために焼かれて死して地獄におつると仰せられたと聞いて、恐ろしくなって、火の難をのがれるには水にしくはないとて、船に乗って海に浮かんだが、さてその日になると船火事にあうて死して無間地獄におちた。
又ダイバの弟子、クカリ比丘は生きながら大地が裂けて無間地獄におちた。しかるにシュナセツタは様々多くの大罪を造ったが、仏のみもとへ参って、罪を消して頂いて地獄をまぬかれたと。
こういう話を聞いて思案が定まるべきであるのにそうはいかなんだと見えて、ギバに云うよう、
「余、今彼等の話を聞いても、どうも安心が出来ない。余を汝と一緒に一っ象に載せてくれよ。ビルリやクカリのことを聞いて、いよいよ怖くなった。仏の御許まで行く間に、もしも地獄におちかかったら、汝が抱きおさえておとさぬようにしてくれよ。汝は信仰ある者だから、地獄にはおちぬ。イヤ〳〵何ぼう余と一緒でも、汝は堕ちる気遣いのない人だから、是非共そうしくれ」
と、ひたすら頼んで一つ象に乗って往かれた。こうしていよいよ仏の御許に参った。
サア、仏世尊は阿闍世王に対して如何なるお教化があるか、しっかり心を留めて味い奉らねばならぬ至極大切の点はここである。これからの仏の御説法は外の事はない、唯阿闍世王の心には、罪の無い父を殺したで、必定地獄におちると思いつめて、如何に仏世尊でも我身ばかりはお救い下さることは叶うまいと疑いきって居るから、その執心を打ち砕いて信仰を起こさせるお諭しである。
それであるから仏は実に温厚なお顔をもって、慈悲のあふるるお言葉をもって大王にお告げ遊ばすよう
「一切衆生の造るところの罪に、凡そ二種あって、一っには軽い方、二っには重い方である。もし心と口で作るならばそれは軽い方であるし、心と口との上に、更に身の所作が加わると重い罪である。大王は心で思い口で言い付けただけで、我身で手を下したのではないゆえ、その報いも軽いことは勿論である。そうでありましょう大王、大王は口で殺せと命じたのではありますまい、ただ足を削れと云うたまでありましょう。大王たとい御自

身に、唯今父の王の首を斬れと御命じなさるや否や、父の王の首が前へ飛んだほどの罪を犯したとしても、仏は決して見捨てたまわぬ。いわんや大王には殺せと御命じなさったのでないもの、どうして罪がありましようぞ。全体気違のしたことは罪にならぬのです。気違いにも四通りあって、一には貪欲煩悩が本で気の違うたもの、二には性に合わぬ薬を呑んで気違いになったもの、三には色々と呪詛（のろ）われて気違いになったもの、四には過去よりの業因によって気の違ったもの。この通りであるが我弟子の中にも色々の気違いがあって、随分悪業を働くけれども、我はそれを戒律を破った者として咎めは致さぬ。そういう者の所作は、悪道に堕つるものでない

今大王も、国と王位とがほしいという貪欲狂の上から為されたのであるから、罪にはなりませぬ。酒に酔い狂うて覚えなしにしたことを、醒めた後に気付いて心底から後悔したならば、誰も是を罪に行うはずはないではありませぬか。大王もその通りで貪欲の酒に酔い狂うての所作であって、本気の沙汰でないもの、どうして罪ありと云うことが出来ましようぞ」

と。かように、いろいろと言葉静かにお慰め遊ばして、最後に慰めの頂上に達して、おごそかに仰せらるるよう

「大王が父王を殺して罪があるというときは、諸仏世尊も矢張り同様に罪があるわけである。何故ならば父王ビンバシャラは、常に諸仏に供養してその善根によって、今世に王の位に登られたのである。もし諸仏が父王の供養を受けずば、父王も国王の家には生れぬであろうし、従って大王も国と位とのために、父王を殺す心も起りますまい。三世を見通しています仏陀が、大王が王位のために父を殺すべしということを知りながら、父王の供養を受けて、父王に王位に登るべき果報を得べき因縁を与えた以上は、大王が父王を殺したとて、それを大王ばかりの罪とは云うことが出来ぬ。大王が地獄へおちるときは、諸仏も共におちねばならぬ。諸仏が罪を得ぬならば大王ひとり罪を得るはずがない。よって大王が地獄におちるならば、仏陀は必ず救わねばならぬ。人の供養を受ける仏陀が、大王の地獄におちるのを黙って見ていることは、どうしても出来ぬことである」

と、細々にお諭し遊ばし、ことごとく大王を御慰めになった。実に実にお慈悲の極点である。是程までに罪悪のものに同情を寄せていただいて、どうして黙っていられよう。唯かたじけない、有難いとよりすがる外はありますまい。この慈悲の塊りのお言葉によりて、阿闍世王の結びつめた真闇な胸が一時に開けて、まるで長い長いトンネルの中をたどりたどって、急に広い海辺に出たような心地であ

無根信

った。日夜苦しみ抜いた大王が一時に安心が出来たので、ここに自から信仰を述べて、大いに喜ばれた。其言葉は次の通りである。

「仏世尊よ。私が世間を見ますに、イラン樹と申すあの至極臭いいやな樹の種子からは、必ずイラン樹の生え出ずるのは当然であるが、決してイランの種子から、あの結構なセンダン香木の生えるためしはありませぬ。しかるに不思議ではありませんか、唯今はイランの種子からセンダンが生えました。イランと申したのは我身であります。センダンとは私の今得たところの信心でありますして見ますれば、この信心は、無根信と申してよかろうと存じます。私ははじめの間は仏陀を信ずることは出来ませぬのでありました。もし私が仏陀に遇い奉らなんだらば、無量永劫無間地獄に沈んで無限の苦しみを受けるのであったに、今幸に仏陀を信ずることを得て、未来永劫の大幸福のもといが出来ました。実に不思議の中の不思議でございます。今かく私が仏陀の慈悲に遇いたてまつりて、私の胸の中に与えられたる大善大功徳の仏のお力は、罪悪深重、煩悩熾盛の一切衆生の悪しき心を破壊して下さる」

と感涙にむせばれた。仏これを聞きたまいて誉めて曰く

「善いかな、善いかな。実に今汝は、仏陀の大慈大悲のお力は、罪悪深重、煩悩熾盛の大罪人、大悪人の悪しき心を破壊して下さるということを、深く味わわれた。能く実験された。これは決して大王ばかりの罪が滅びたのではない、尽未来際の一切衆生の悪心を破壊されたのである。大王がたすかったのは、大王ばかりたすかったのではない、一切衆生がたすかったのである。大王が逆罪を犯してたすけて貰うたのは、永劫の間、五逆罪を犯したる罪人がたすかるという先達をせられたのである。大王の頂かれたる仏のお慈悲は、一切衆生の悪心をほろぼされるのである」

と申された。阿闍世王はこの語を聞いて、

「ああ有難いかな、かたじけない哉。もしかく一切衆生の悪心が破壊せられるならば、私はたとい阿ビ地獄に堕在して、無量劫の間もろもろの衆生のために大苦悩を受けても、苦とは致しませぬ」

と云われた。実にここが信仰の極処である。歎異抄の眼目は、実にこの処をあらわされたのである。即ち第一章には『罪悪深重、煩悩熾盛の衆生を、たすけんがための願にてまします』と云う、第二章には『たとい法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。そのゆえは、自余の行を励みて仏になるべかりける身が、念仏をもうして地獄にもおちて候わばこそ

すかされたてまつりてという後悔も候わめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし』というが如きは、この阿闍世王の如き罪悪観をおこし来って、絶対の仏の慈愛を蒙りたるものに非ずんば、決して云えぬところである。私の求道学舎に在りて信仰を得た人が阿闍世王が、地獄におちて苦しんでも苦とせぬといえる一言を、非常に喜ばれた。

実に前には地獄におちることを愁いて、身心悩乱せる阿闍世王が、仏陀の慈愛を蒙られて後は、地獄におちても苦とせぬとは、如何にも精神状態の大変化である。度々くりかえす如く、私はこの阿闍世王の苦悶と安心の様子を見てどうしても他のこととは思えぬ。甚だおそれ多いことであるが、親鸞聖人はたしかにこの阿闍世の告白をもって、直に自已の内心を、如何にも能く描いたものと考えられたものらしい。実にこの阿闍世の告白は『法然聖人にすかされまいらせて、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候』といえる信仰と、符節を合わせたるが如くである。私はかって病気にかかった時に、実に阿闍世以上の悪人たることを自覚した。此頃親友の一人が、偶然の出来事により一大悲観におちいりて、その瞬間に、自已はこれ阿闍世なりと、確信したと云われたが、親鸞聖人の信仰は、青草人のあらん限りは、つきざる信仰である。

しかるに私、幸に聖人の化導によりて、七年以前に仏の慈愛に接して以来、まことに安心の身にして貰い、ことに彼の『法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候』の一言は、私の生命となって下されて、人生如何なる出来事に出遇うても、不幸なる境遇に処するとも、この一言は益々光を放って、永久に希望の生命を与えたまうことである。しかしてこの永久の生命たるや、其時仏が阿闍世にのたまいし如く、一切衆生平等に授かるべき生命である。はたしてその時、マカダ国の無量の人民、ことごとく菩提心を発し、阿闍世王及び夫人、後宮婇女に至るまで、みな菩提心を起したりきここに於て阿闍世は感謝の涙にむせびつつ、ギバに云うて曰く

『ギバ、われ未だ死せずして天身を得たり、短命をすてて長命を得たり、無常の身をすてて常住の身を得たり。もろもろの衆生をして、無上菩提心を起こさしめたり。即ちこれ天身なり、長命なり、常住の身なり、即是一切諸仏の弟子なり』

と。かく語りおわりて阿闍世は、仏陀の御許に、もろもろの香りある花をささげ、妙なる音楽を奏し、偈を説いて感謝の状を披瀝し、仏陀の御徳を讃嘆したてまつりぬ。その偈文に次の如き言葉があった。

如来は一切の為に、常に慈父母となりたまえり。
当に知るべし、諸の衆生は、皆これ如来の子なり。
世尊大慈悲、衆の為に苦行を修したもうこと、
人の鬼魅（きみ）に著（くる）わされて、狂乱所為多きがごとし。

実にこの言葉は、何ともいうて見ようのない、有難い言葉である。如来は一切の衆生のために、常に慈悲の父、慈悲の母となりたもう。まさにしるべし、もろもろの衆生は皆これ如来の子なり。ここに至りて仏陀の慈悲は、言語に絶してある。無始曠劫より尽未来際の末にいたるまで、いやしくも生きとし生けるもの、男となく女となく、尊となく卑となく、階級の上下にかかわらず、智識の有無に関せず人種の如何を問わず、古今東西、一切の衆生は、皆これ如来の愛子である。ことごとくこれ兄弟姉妹である。しかして如来は、我々子供のために、種々の苦労をせられて、信仰に引きつけて下さることは、実に一通りの骨折りでない

私は釈尊の本生譚（ほんしようたん）を見るごとに、如何に仏陀が、菩薩として修行したまえるときに、御苦労下されたかということを思うて、遠き遠き昔より、かくも憐みをたれたまいたかと、胸が塞がることがある。親鸞聖人が『久遠劫よりこの世まで、あわれみがむれるしるしには、仏智不思議につけしめて、善悪浄穢もなかりけり』と感謝せられたるは、実にこのところである。又法蔵菩薩の修行を見るに『或は長者居士、豪姓尊貴、刹利国君、転輪聖帝となり』とのたまいたるも実にここのところである。歎異抄の結文に『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり』とのたまいたも、如来、大慈父の御苦労を御一人に引受けられたる告白である。その大慈父の如来が、衆生を信仰に導くがために、非常に御苦労下さることは、あたかもこの俗界に於いて慈父が自分の子供のために色々と心配をして、撫育してくれることは、到底尋常一様の他人の心で、推察することは出来ぬ。他人から云えば、すこぶる矛盾した行もあろう、他人から云えば理屈の合わぬこともあろう、甘やかし過ぎるということもあろう、かえって子のためにならぬとも云うだろう。何のことはない、あたかも人が狐狸につかれて、わけのわからぬように狂い廻わると同様に、仏陀の大慈父は、衆生のために、出来得るかぎりの善巧方便をもって、信仰に導いて下さるのである。

実に仏陀が、阿闍世王に対して下したまいたる大慈悲の徳音は、道理理屈を離れて、唯々満身同情の塊りというより外はない。ここにおいてこそ枯木再び花開き、いり豆が再び芽を出した所以である。実にこれ極端なる罪悪観に対して、救済の至極を垂れたまいたる点である。歎異抄の特徴の第一たる、悪人救済といえることは、以上段々告白懺悔し来りたる事実によりて、私は十分に味わわして頂きましたままを飾りなく有り體に披瀝したのであります。

二河白道の歩み

福島政雄

此のお喩について私が感じを持つようになりましたのは二十六歳の夏の心機転換以後のことであります。その転換の三四カ月前から私は此の人生を非常に淋しく感じていました。その時のことをふりかえって、空曠のはるかなところに行きかかって四方を見ても更に人物なし、ということが感ぜられ始めた時と思います。父母に対して隔て心を持ち、友人に対しても自分の心を打ちあけることが出来ませんでした。

併しその心境はまだまだでありました。自分の姿が見えていたのではありません。一種の感傷気分と申しましようか、むしろ浪漫的に人生の淋しさを感じていたに過ぎません。そして心機転換の当座は法悦状態のようになっていましたけれども、それで信仰が確立したとは言えないのでありました。両親に対してもまだ心を打ちあけるということは出来なかったのであります。

二十七歳の三月十一日の夜に大経の五悪段の第五の悪というところに感じて、自分は実際「子無きにはしかず」と言われるような子であるとわかって参りましてから、少しく自分の姿が見えて来ました。併し二河白道の痛切なすがたを自分の上に感ずるということにはまだまだ遠かったのであります。

三十台の私は煩悩熾盛言語道断のすがたでありましたが二河白道をやはりお喩として感じていたにすぎません。近角常観先生が二河のお喩は単なるおたとえではない。比喩以上の比喩であるとお説き下さっても、そのお心持がよくわかりませんでした。

此の正しきに鈍な私でも、六十、七十という老齢になって参りますと、二河喩のお心が少しはわかるようになりましたかと思われます。一体私は二河喩を絵を見るような心持で受取っていたと思います。ひろさ四五寸の白道をわたって行く人を眺めるような気持であったと思います。自分の姿であるのに、それを他所事にしていました。

おもえば東岸発遣の声、西岸招喚の声、それを聴いているのは私であります。水火の二河も私から噴き出している二河であります。私は四五寸の白道を綱わたりのようにして歩いているのではありません。私の足は河底について居ります。四五寸と見えたのは私がまだ自分の姿に目ざめないで聖道門を望見していました時の聖道そのものでありました。また河岸の悪獣毒虫が見えはじめたのは私の煩悩の自覚のはじめでありました。今や私は貪瞋という根本の煩悩のただ中に歩んでいる自分を自覚します。そして私の歩んで行く道は親鸞聖人の仰せられているように大般涅槃、無上の大道であります。貪瞋の水火の中に開ける大道であります。私は苦しみながら安らかに進んで行くのであります。

発遣の声はおごそかであります。釈迦牟尼世尊の御教であります。その四聖諦や十二因縁の御教は私のすがたを指示される御教であると感ぜられます。招喚の声は世尊御自身もおききになった声であります。それが今は私に絶間なくきこえて来るのであります。私のいのちの底まで徹して来る永遠の声であります。此の御声によって煩悩の私が勇気づけられて行くのであります。

ここに私の心の問題となるのは群賊であります。後方から追いかけて来るという群賊であります。これは本当は賊でないと私は感じているのであります。二河喩によれば行者が五歩六歩水火の中に踏み込んで行くとき、うしろの方に優しい声がきこえる。この険難の道を進まずに我々の方に帰っては如何であるか、我々は害心をいだくものではないと言って呼びかけるとあります。併し行者は振り向きもしないで一筋に招喚の御声の方へ進むとあります。これは私の感じますところでは次のようになるかと思います。

書物を読むようになりました年頃から私は中江藤樹先生を知りました。四十近くになりました頃、藤樹先生全集の中の年譜を繰返し読みまして非常に心を打たれました。その他、青年時代には論語や孟子も教科書として全部を読まされ、孔子の教にも感じても居り、同じ頃聖書のマタイ伝の山上の垂訓を読んでは深く感激しました。またマルクスアウレリウスの自省録なども精読して哲人の教に感じたものであります。併しそれらの教のとおりに私が実行出来たかと申しますれば、まるで駄目でありまして、私は人間らしい歩みをせず、自分の性格上の欠点をそのままに押しとおして、青年壮年を通じて傍若無人な独り善がりの生活を続けて参りました。それで私という人間は聖賢や哲人の教に対してまるで背中あわせの生活をしまして、若し、聖哲の教をもってさばかれたらば、私は死ぬより外はなかったのであります。それで私は聖哲をあがめるつもりでありな

がら実は聖人哲人の前にいのちをとられるおそろしさを心の奥には持っていたと思うのであります。意識の表面では聖哲を群賊などと思うことはつゆほども無かったのでありますけれども、煩悩そのままの私でありました故に、聖哲の教を正面から受くれば死ぬより外はない身であったのであります。そのことを親鸞聖人の御教によって自覚させられるようになったのであります。

併し聖賢哲人が群賊であろう筈がありません、煩悩の根本自覚に入りまして後の私には聖賢哲人が本当の聖哲として仰がれるようになったのであります。聖哲の教は私を照らす鏡となったのであります。私はペスタロッチやソクラテスやプラトンにも心を入れてその教を受けたのでありますが、これらの聖哲の教によっても、いよいよ私の煩悩悪業の姿を深刻に徹見させられるようになったのであります。

それで私は年齢が進むにつれて、此の世界を弥陀の本願に生きつつ歩む求道の道場であると感ずるようになりました。もとより私には深い苦しみもあり、平素あまり快活な顔もしていませんけれども、世界の聖賢哲人のみならず大自然そのものをさえ求道の善知識として仰いで行くという心境が少し開けて参りました。二河のお喩は私をここまで導いて下さっているのであります。もっとも善財童子のような求道には及びもつきませんが。

若かった頃から私は親鸞聖人の晩年のお手紙に深く感じていました。私は聖人を研究したのではありません。聖人の御述作で私の読んでいないもの、読めないものが沢山あります。お手紙でも宗旨に関するむつかしいところは私にはわかりません。併し「笠間の念仏者のうたがひとはれたる事」というお手紙などには深く感じています。聖人は非常に広いお心を持っておいでになったと感じます。「よろづの仏、菩薩をかろしめまいらせ、よろづの神祇。冥道をあなづりすてたてまつるとまふすこと。この事ゆめゆめなきことなり」というお言葉も私の身にしみています。聖人は弥陀一仏を信ずる故に他の一切の教を排斥するというお心持ではないのであります。一切の善い教に対しては敬虔の心を持っておいでになります。ただ御自身は、弥陀の誓願不思議に助けられまいらすより外に生きる道がないと感じておいでになるのでありのす。それで二河喩の中の異学・異見・別解・別行の人という言葉も、聖人はむしろ和やかなお心で受け取っていられるものと思われます。自分の行く道だ此が正しいぞというお心持ではないのであります。

此のようなお心持の聖人の御教に私は二十六歳の夏以来今日に至るまで、哺まれて参っているのであります。それで私自身は偏狭な性格でありますけれども、その性格を聖人の御教によって和らげられて参ったことは事実であります。もっとも今日となっては老年の頑固ということもありまして、なかなか聖人のような広い心にはなれませんけれども併し広い心の御廻向を受けるということはありまして此の世の中の色々な人や物事について余裕のある見方は少し出来るようになりました。それで大般涅槃に至る無上の大道を歩んでいるという聖人のお言葉を拝借するのは潜越であるとは思いながらも、私は悪業煩悩だらけの此の私の人生の行路に、何となくお念仏の心のうるおいを感じ、諸聖賢の教の鏡にいよいよ駄目な自分の姿を見せられつつ、併し何となく心に余裕を感じ、老境を楽しむ心さえも少しは涌くという有様で日を送っていますのであります。

二河の喩は本当に私自身を自覚させられるお喩でありました。七十を超え八十をも超えました此の晩年、孔子の「七十にして心の欲する所に従えども矩（のり）を踰（こえず」と言われているような境地は思いも及ばぬことでありますが、二河喩そのままの私の歩みを自覚の下に続けさせていただくことを有り難く感ずる次第であります。

（昭和四十六年十二月三十日）

あゆみの跡

臼杵祖山

昭和四年十二月二十三日

偏した愛を持つものは、偏した憎しみを持つものである。この愛憎の二偏は、人を敬愛する道でないと同時におのれを任持する法でない。

これはただ偏した憎しみが、憎しみというにとどまらずついに偏した愛しみも、また疎濁するに至ることになるは理の当然である。余程明察せねばならぬことと思う。

人はひとしく人である、これに由って人々の上に心々照融し、明鏡と明鏡の灯火をからざる底の明察あるべきである、どうして偏愛偏憎の妄情の暗影を持ちて、この照融明察の心鏡を覆うことをなすべきであろうか。

若しあやまってこの二偏の執念を起したならば、自分のみを偏愛する妄情を転じて、これを自他博愛の真をおこしまた他人のみを偏憎するの姿を転じて、これを自他照融の実をあぐるということが望ましいのである。

昭和二十三年春

遺　詠

一息は一息ごとに死の巌頭こゆるのみ声は六字名号
いざゆかん生滅々己常楽の御親の里の花のうてなに

一道会の記

榊原徳草

池山先生を追憶する一道会。回を重ねて今年は三十四回忌である。最初は家内中が集って先生のお写真の前でお勤めした。子供等に歎異鈔一章宛を拝読させたものであった。

そうしたことが花田先生との話合いによっていつしか、恩師の会となり、師の徳光に浴した人々の集りとなったのであったが、今年は長崎の松本様から十日も前から宿屋の予約を依頼され、十七人も来会との電話をうけた。そして座談会に夜おそくまで遭って宿に行きたいという注文であったが、丁度近くに宿があって一安心であった。

会の三日前に、花田先生が発熱してどうしても出られぬとの通知で、私は一時気が脱けて暗い気持になった。それに又池山寿夫様が肺炎で経過はよいが参会出来ぬとの速達をうけて、全く重い心を抱いての準備であった。

前日の二十三日午後に長崎の岸川様夫妻が先ず訪ねられた。令室は初参会で御紹介を頂き「当日は妻に特に時間を割いて頂くことは六ケしいので、初めての妻にご法話を願いたい」とのお話である。岸川様は都ホテルに泊られる由で、来年は二十九日になるが宿の予約をして帰りたいとのことである。来年参会のこと、その日まで教えられ全く参ってしまう私であった。先師の常に云われた「念仏は自動作用する」ことが、現にかくまで働きずめの大悲倦むことなき光照に身のしまる思いであった。些細な一小事のようであるが私には念仏の実動をそこに感ずる。

長崎の聞法会の人々、それは高原憲先生（医師）と山本普道師の法乳に育てられた方々である。高原先生は東京の一高時代に近角先生の求道学舎にあって聞法せられ、九大医学部に在学中は仏教青年会の幹事として近角先生を迎えられた人と聞いている。深い御仏縁に催されて多数参会下さって、今年は昨年に増して和らぎと親しさを覚える。

二十四日は良い日和だった。早くから毎月の静坐会の人々に来て頂いて参道の清掃や食事の準備である。そのうちに四国の葛西姉が見える。河合さん村上さん戸田さん、そ

の他の人々が大車輪の活躍である。昼食が予想の倍程の人数になる。浄住寺は法の津沢を得て既に六種に震動し出したのである。我等の年に一度の真の報恩の一道会である。日は和らぎ人々は仏の加威力によって活潑々地である。

午頃から参会の人々が続々とみえる。始まる前に約七、八十名となった。縁側と十五畳・十二畳、それに通り間と一杯である。皆様がご挨拶されるが、未知の人々が多い。顔は覚えていて名を忘れた人、小さい時に会って今日に及ぶ人、九州、四国、山口、広島、岡山、奈良、三重、愛知、福井、大阪、京都等々から出掛けて下さった人々、私はもう酔うて終いそうであった。

午后一時少し過ぎ開会。例年の如く小経、掛和讃を読誦する、そして先師の御写真に向って、歎異抄十章まで拝読する。毎年のことであるがどうしても「幸に有縁の知識によらずんば云々」のところで声が震う。好き人に遭わなかったなら、本当にお念仏一つで身心柔軟し、腹満ちて何も文句のない、一味の信をどうして獲られよう。私はかって念仏とは自我崩壊の音であると言ったことがある。先師は念仏は、罪障の氷がとけておちる音だ、とも、光りの滝を浴びるようだとも仰言る。念仏の一声々々に自我が崩れ落ち、バラバラになった自我が、罪悪深重、煩悩熾盛と写ってくるのである。これは好き人を通してはじめて我が身に知らされる姿であり、御念仏である。

次に追憶会の開会となる。私は初めて先生にお会いした四十余年前の、下総会館での印象を述べた。何の変哲もない紺の背広を着た先生のお話、感激も何もない。これが有名な池山先生なのかと疑った。お見送りして自動車が去るのを茫然と眺めた時の私のことを話した。それが、いつ、どうして、先生のお言葉ではないが「なくっちゃならない人」になってしまったのか、私にはその間の時間的経過が今もって判らない。いつしか「ああそうですか、南無阿弥陀仏」に引き込まれてしまったのであった。そんなことをお話して、それから私は先師の『仏と人』の最初にある〃大いなる受入れ〃を拝読した。

○

〃君がたが体験し得るもののうちで、一番大きいものは何か。それは大いなる蔑視（べっし）の時だ。君がたの幸福も、理性も、道徳も、からきしつまらないものになってしまう時だ〃

こう喝破（かっぱ）したツアラトウストラ――ニイチエは、他面、超人を理想として〃今こそ人間がその至高の希望の萌芽を植えつけるべき時だ。悲しい哉、やがて人間がもう自分みずからを見下げることの出来ない時がくるのだ〃と焦っている。

しかし超人への道は嶮しい〃人間は綱である。動物と超人との間につながれた懸崖上の綱である。あぶない渡り、あぶない道すがら、あぶない顧み、あぶないおののきとたたずみ〃である。

しかるに私達は凡人である。万善諸行の如き、まじめに修する心だに起らない。苦悩の旧里は捨てがたくて、愛欲の広海にしずみ、名利の大山に迷いつつある。われながらいやになってしまうのであるが、どうにもそれから出られない。超人への綱渡りの如きは思いもよらない。

それにもかかわらず、超人への歩みをうらやみなしに見ることはできない。何たる奇妙なとりあわせだろう。

二河の前に立ちすくんだ旅人をして、東岸の声に耳をそばだてしめるのは、こうした情緒がそうさせるのではあるまいか。

東岸の声のすすめるのは白道への転向である。そしてその転向こそは、超人を更に超越して、超々人—仏への憧憬（あこがれ）の実現を可能にする。

そもそも超人道と白道とは、絶対に相容れないものではない。歴劫迂廻の自力修行と、一念横超の他力摂取と、その方法こそ異なれ、めざすところは究竟向上の一に帰すべき理由がある。

白道の手前一歩のところまで追いつめられて、しかも東岸の声のついに聞えずじまいに終る人がある。

かなしきは　飽くなき利己の一念を
持てあましたる男にありけり　（啄木）

かくも自己の上に凝（こ）らされた目をもって、聞くことが出来たであろうなら！である。

ここは弘誓の強縁の支配する境地である。

西に向上の一路を辿った旅人は、身にまつわる内外の障碍、群賊悪獣毒虫に追いたてられて、わずかに万一の希望として残されたのは、中間の白道一つである。

東岸の声は白道を指摘してその絶対安全性を保証した。道がある上からは、渡って渡れないこともあるまい。ではこの道を行こうかと、思い切って一歩を白道に踏み入れようとした途端、〃汝一心正念にして直に来れ、我よく汝を護らん〃という西岸の声がはっきりと聞えた。

白道への踏み切り、私はそれを大いなる受入れという。自分を見下げ果てた時が、私達の体験し得るいと大いなるものだということは疑いない。が、ただ自分を見下げ果てただけで終るのでは、体験としていかに大きいものであっても、結果から言えば、ただ悲惨という一語に尽きる。それは単なる価値破壊でしかない。

大いなる見下げ果ては、大いなる敬い、大いなる受入れ

の前提、もしくは反面として、はじめて絶大の価値が含まれる。

私はいう〃人間の凡そこの世において体験し得るものの中で一番大きいものは何か？それは大いなる受入れの時、念仏申さんと思いたつ心のおこる時である〃と。

二河白道は善導大師の体験である。旅人の受入れは、大師の受入れである。凡そ獲信の体験ある人にして、旅人と同じような境地に立ち、同じような受入れをしたのでない人はほとんどない、といっても過言ではあるまい。

一切経を五遍も読みながら、法の深妙に比べて我が機の及び難きを痛感し、朝な朝なに定めて悪趣に沈まんことを恐怖し、夕べ夕べに出離の縁のかけたることを悲歎された法然上人が、独り善導大師の聖書にこころひかれて、八遍目に〃一心専念弥陀名号〃の文を読むに及んで、〃予がごとき下機の行法は、阿弥陀仏法蔵因位の昔、かねて定めおかるるをや〃と気付いて、感悦髄にとおり落涙千行、高らかに念仏をとなえられたのは、即ち白道への大いなる受入れである。

親鸞聖人がまだ十九歳の青年として磯長（しなが）の廟窟へ参籠された時は、はやすでに一人法師の旅人であった。

それから十年、六角堂の参籠は、とうとう二河の前に立ちつくした姿である。歩みを吉水の禅室にはげましたのは心が白道へ働きかけた徴（しるし）である。

四十三の歳に大いなる受入れをすまして、爾来二十幾星霜、今年六十九才の老上人と、血気盛りの若々しい聖人との会見、私にとって、なくてならない人同志の初の対面、何たる、凡そこの世にありうべき限りの荘厳な場面であろう。

この時、聞く聖人の胸の中は〃いずれの行も及び難き身なれば〃という二十九年の体験に成る箸（ほうき）で、隅から隅まで掃きつくされて、文字通りからっぽであった。成仏への進展に役立つべき何一つ持合わせていない身の〃とても地獄は一定すみかぞかし〃とうなづかずにはいられなかった。

一方、説く上人の前半生の体験、これまた聞く人のそれと髣髴（ほうふつ）たるものであった。

説く上人は、曽ての自分の再現としか見られない若い聖人の手を取って、わが来た道を案内した。わたしも実はその昔と、語り出す一言一句は、聞く聖人の今現に、もしくは曽て体験したのでないものはない。聖人のうち明ける片言隻語、これまた上人の前半生の体験の中におさめられていないものはない。後進は先達の踵（くびす）に接（つ）いで、両者の歩調はぴったり出合った。

絶壁と深潭（しんたん）、毒蛇の巣窟のくさむら、猛獣

の蟠居（ばんきょ）する原始林、ややともすれば足をとろうとする蔦葛（つたかずら）、あまつさえ劔を按じて忍び寄ろうとする怪賊の気配、自力聖道の道は嶮しかった。もうどうにもこうにも足のふみどころもなくなったと思った刹那、先達の指示する方を見やる！その一方は森がすけて未曽有（みぞう）の不思議な光景が展開している。そして細々ながら辿るべき道が—たしかにかねてあこがれの彼岸への道がついている。

〃ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし〃

これが先達法然上人の指図であり、親鸞聖人にとっての東岸の声であり、白道であったのである。

聞く方では、からっぽの胸に、吉水への途すがら、一歩は一歩より高まりつつ、今現に温顔に咫尺（しせき）するに及んで、最高潮に達した信頼の念を湛（たた）えて傾聴する。どうして説く人の言葉が、一々そのまま受入れられないはずがあろう。

〃親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり〃

これはその折の大いなる受入れの記述である。

人からもいっぱし信仰があると思われ、自分でも、口に念仏の出にくいのは変だが、心には信仰があるに違いないと、思い込んでいたのであったが、或る時—それは私の四十二の秋であった—ひしひしと逼りくる我身の影、煩悩の跳梁（ちょうりょう）に驚いて、自ら欺いていた信仰にも見放されて、ああ本当の信仰が欲しい、どうしたら得られるだろうと、みどりごが母を探しもとめるかのように、身も心も挙げてこの一点に集中した時、そのとき、ふと胸に浮んだのが〃親鸞におきては云々〃の御文で、これが私に取って東岸の声であった。

私はその声に耳を澄ました。思いを潜めた。ひったくるようにして御文を見つめた。と同時に、不可抗的に引きよせられるまま、御文の中に没入したかの感があった。

あ！そうか！　聖人—私の絶対無二の信頼をささげている聖人—はそうされたのか、じゃあ私も……じゃあ私も念仏しよう、と思い切って南無……と言いかけて、まだ阿弥陀仏と言い切らないうちに——何のことはない、まるで光の滝でも浴びせられたような気がして——つづけざまに、高らかに、生まれてはじめてひとりでの念仏が出るのであった。

何とも言えない、うれしい、安らかな、大船に乗ったような、胸一杯に勝閧（かちどき）をあげるような、力強い頼もしい心地。称えているうちにふと気がついた、そして

うなづいた。あ！これが信仰か！そうだ、これが信仰だと

〃私におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと親鸞聖人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり〃これが私の大いなる受入れであった

大いなる受入れ、それは仏心の凡情への徹到であり、引入であり、凡情の仏心への開発であり、投合である。時から言えば〃念仏もうさんとおもいたつ心のおこるとき〃である。

○

私は、池山先生に来て頂いて、私等今日の一道会の参集の人々に、お話していただいているつもりで、拝読したのであった。そして緊張した気持が読み終ると静かに身体中に溶け入るのであった。温かい安らいが私達を包容しつくすのを感じたのであった。

（以下次号）

白色白光

久保田明聖

卒直に非を認め得ぬ自我故に孤高に見られ淋しさにをり

歯を入れて長生きせよと云ふ医師の言葉嬉しく日々通ひ来ぬ

三ケ日吾に蔭膳据へしと云ふ妹の便りに涙落せり

生き別れ死に別れして天涯の孤独となりて知る仏の慈悲

捨てられし己れと知らず子猫二匹箱よりいでて遊ぶ可愛ゆし

肩のこり柱の角にあててもむ老のさびしさ知る者のなし

念仏を忘るる時し死の恐怖襲ふとさとす師のおん便り

年長く胸病む君と癩を病むわれと生きのび逢ひを楽しむ

（抄出）

念仏詩抄

木村無相

最高の詩

詩
最高の
詩

それは
ねんぶつ
こんなわが身と
〃独生　独死
独去　独来〃
こんなわが身と
しらなんだ

〃南無阿彌陀仏を
とのうれば
十方無量の諸仏は
百重千重囲繞して

よろこびまもり
たもうなり〃
こんなわが身と
しらなんだ

ただ念仏の

〃罪障功徳の
体となる〃
ただ念仏の
徳のゆえ
ただ念仏の
智慧のゆえ

ナムアミダブツ
ナムアミダ

病気

本願――
名号――

信心――
称名――

どうでも
わけねば
おれぬは
病気

ちごうて
ちがわぬ
ことをしれ

如来法蔵さま

如来法蔵さま
ナムアミダブツ

わたしのすること
視てござる
わたしのいうこと
聴いてござる
わたしのおもうこと
知ってござる

如来法蔵さま
ナムアミダブツ
「オーイ」と**「ハーイ」**
ナムアミダブツは
「オーイ」ということ

ナムアミダブツは
「ハーイ」ということ

「オーイ」とよんだら
「ハーイ」とこたえる

「オーイ」も「ハーイ」も
ナムアミダブツ

ひとつでコトたる
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

如来出世の本意

花田正夫

菅瀬芳英和上の思出を白井先生は「聞法録」の中に次のように誌されている。

× × ×

島地和上の御座敷の床間に、蓮如上人御筆の正信偈の御句が掲げられてありました。

如来所以興出世　唯説弥陀本願海

これを眺めておられた御僧（菅瀬師）は、私と友とに向ってこう申されました。

釈迦牟尼仏が此の娑婆世界に御生れくだされたのは何の目的であるかとなれば、他の目的なのではない、唯だ、阿弥陀如来の御本願をお説きくださろうとの御思召であらせられた。

それなら私達がこの世に生れたのは何の目的であるか。これがわからなければ生きた甲斐が無いぞ。それは、唯説ではなくて、唯聴弥陀本願海なのだ。唯、阿弥陀様の御本願を聴くためだ。御本願をお聴かせにあずかるためだ。この一言がはっきりしていないと、其他の事一切駄目だぞ。あなた方が学問をしようと何をしようと、皆そらごとたわごとに止ってしまうぞ。云々。

とあった。私はこのことが何時も心に深く刻まれて、禅の考案のようになっている。ことに最近、生き甲斐ということが色々と論ぜられているにつけて、この一事が思い出されてくる。源信僧都は横川の法語に「それ人間に生れたること大きなるよろこびなり……ゆえに本願にあうことをよろこぶべし云々」と、僧都御自ら本願を聞きそこに身に付けた着物でなく、素裸のなりで、人間に生れたことのよろこびを述べられて御身にかけて私共を誘引下さっている。

蓮如上人は、御文の四帖目四通に

それ秋もさり春もさりて、年月をおくること昨日もすぎ今日もすぐ。いつのまにかは年老のつもるらんともおぼえずしらざりき。しかるにそのうちにはさりともあるいは花鳥風月のあそびにもまじわりつらん、また歓楽苦痛の悲喜にもあいはんべりつらん、なれどもいまにそれとおもいいだすこととてはひとつもなし。ただいたずらにあかし、いたずらにくらして、老の白髪となりはてぬる身のありさまこそ悲しけれ。されど今日までは無常のはげしき風にもさそわれずして、我身ありがおの体(てい)をつらつら案ずるに、ただ夢の如し、幻の如し。いまにおいては生死出離の一道ならではねごうべきかたとてはひとつもなくまたふたつもなし。これによりてここに未来悪世のわれらごときの衆生を、たやすくたすけたもう阿弥陀如来の本願のましますときけば、まことにたのもしくありがたくおもいはんべるなり云々。

と、老上人の御心に、人生萬事、笑ったり、泣いたり、腹を立てたりしている内にいつのまにやら過ぎ去って、夢の如く幻の如しと映ったことであろう。そうした中に、夕陽が西の空に没して四辺が暗くなる時、明月の光がいよいよ大空にかがやくように、上人のみ胸に本願のたのもしさをいよいよ渇仰随喜せられている。私も七十近くなって老上人のお言葉がいかにも私共の心を言いあてて下さっていることよと、身にしみて覚えるようになった。昔から、いのちは法のたから、と云われるが、八十年、九十年かけて味って下さった祖師や上人方のお言葉がすこしずつ〳〵新しく知らせて頂けることは、老いの無上の喜びである。

× × ×

さて私共が、八万四千といわれる仏法の大海に向うとき、釈迦仏の出世の本意が何処にあるのか、全く、多岐亡羊の嘆きにあう。仏教二千五百余年の歴史において、各宗の祖師達は皆苦心惨憺してそこ一つを見出そうと努力せられていて、夫々にこれこそ出世本懐ぞと勧めて下さる。

しかし、その一つ一つを学んで行くこともなかなか大変であるし、その見分けをすることはさらに至難である。まして自分のひとり考えで、興味本意なものずきや、のぞき見などではおよびもつかぬことである。

私自身の唯一のよすがは、親は子になくってはならぬことのために苦労されるという事実、換言すれば、仏は衆生の苦悩のために本願をおこされているという真実である。そこに、仏出世の本懐いずこと探す前に、一体自分自身はどうした人間であるかを知ることが先決問題となる。

夜もすがら仏の道をたずぬれば
わがこころにそたずね入りぬる

と、源信僧都は仰言る。しかし、自分の顔を自分の眼で見ることが出来ず、狂人が狂を自覚出来ぬことも事実である。私共には、身びいきな心が根深く強く働いて、身勝手な結果を当然と思いこんで、自分に都合の悪いことはあり

得べからざることとして飽くまでも拒否する。病床六尺で正岡子規は「人間の苦痛は余程極度へまで想像出来るが、しかしそんなに極度にまで想像した様な苦痛が自分の此身の上に来るとは一寸想像せられぬ事である」と、人心の機微を難病の床にあって告白している。このように苦痛に対しても、病死に対しても、罪悪に対しても、そのまま正しく受け取ることが出来ぬ。身びいきな心のために、これこそ本当の自分だと思っていることも、とんでもない痴人の夢にすぎぬと知らされる。

ここまでくると、親鸞聖人の仰言る通り、穢身をいとうて清浄なものを、求め得る人は智者賢人で、愚者には不可能であると知らされる。して見れば、自分の正体もわからず、まして仏の本懐など知ろうなどとは身の程も知らぬ狂気の沙汰と申す外はない。

法然上人行状絵図の第六に

「もし無漏（むろ）の智剣なくば、いかでか悪業煩悩のきずなをたたんや、悪業煩悩のきずなをたたずんば、なんぞ生死繋縛の身を解脱することを得んや。悲しき哉や〳〵、いかがせん〳〵。ここに我等ごときはすでに戒・定・慧（かいじょうえ）の器（うつわ）に非ず。この三学のほかに我心に相応する法門ありや、我身に堪えたる修行やあると、よろずの智者にもとめ、諸々の学者にとぶらいしに、おしうるに人もなく、示すに輩もなし云々」

と、肺腑をつく御告白がある。

山に登って二十年「いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」となられた親鸞聖人は、遂に叡山を下られたのである。

しかし、両聖人が、永年の修行によって、これが得られた、あれも解ったということであれば、私には用事のない、よそ人であった。幸にも両聖人は矩を一つにされて、誇るべき何ものもなく、たのむべき何ものもない身となられた。このことによって、私のよき師となってくださったのである。

この両聖人のみ胸を貫ぬくものは、五逆・謗法・闡提（せんだい）の難治の三病、難化の三機を一人のこらず往生成仏せしめて下さる選択本願の無碍光であった。無碍とは如何なる悪業煩悩をもあきれたまわず、捨てたまわぬ御心である。たすかるべからざる者を如来がかねてしろしめされて、極悪最下の者のために極善最上の大法を選びとって下さったのである。その道光はそのまんま私共の心の闇をひらき、罪障の氷をとかして下さるのである。

思うに、法然上人の御出家の動機は、父君が殺害せられるという大惨事にあったそこに父の仇を討つのでもなく、

そのまま放置するのでもなく、御自身と共に殺された父君もまた父君を殺害した仇敵も、残らず救い遂げられて成仏出来る無上の大道なくしては、上人の真実の安心とはならなかったであろう。ゆくりなくも法然上人はその大道を弥陀の選択本願に聞さとられたのであった、何という大歓喜であろうか！

釈尊の御晩年に王舎城の大悲劇がおこり、わが子阿闍世のために夫王も殺され、自身も幽閉された韋提希夫人が救われる顚末を観経に説かれているが、先ず自身の救いを喜ぶと共に、悪逆の子阿闍世もまた救い遂げられる弥陀の大悲の本願ありと知らされて、大満足、大歓喜の身となっている。

近角常音先生のお歌に

このこころこれを阿闍世とのたまいて
見捨てじというみ慈悲なりしか
よしあしはひとにはあらん大悪の
阿闍世われにはよしあしはなし

と、悪逆の阿闍世の上に御自身を見出されて、弥陀仏の大慈悲一つを渇仰せられている。

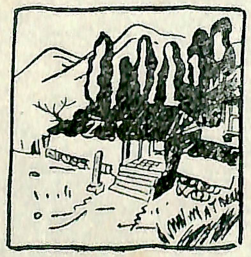
近角常観先生が脳溢血で療養せられて約一年目の詩に昭和七年十一月十一日、涅槃経の善巧の句義と歎異抄第九章と同意なるを感じ、作あり、

阿闍世王の為に
涅槃に入らずの章
善巧大聖の涙
矜哀無尽蔵なり

と、讃仰せられている。親鸞聖人が教行信証の総序の文に、仏敵の提婆も、愚痴の韋提希も、悪逆の阿闍世も、のこらず権化の仁（じん）として、その善巧を謝していられるおこころも同意と頂いている。

「如来出世の本意、唯弥陀の本願を説かんとなり」

聖人が正信偈にこの金言を掲げて下さっていることは、煩悩具足の凡夫のあろう限り、その者の救いの光となって尽未来際かけて照し抜いて下さることである。



あとがき

「二月は逃げる」と昔から云われていますが、名古屋では一年中で一番寒い月であります。この月は仏陀の涅槃会と聖徳太子の忌月で仏教徒にとっては意義の深い月であります。サラソウ樹の下に「法に帰依せよ、自らに帰依せよ」と御入滅を前にねんごろに遺言された釈尊、そして又和国の教主とあがめられた聖徳太子は「世間虚仮、唯仏是真」と常に仰せられつゝ四十九才で疫病のために急逝せられたが、日本に仏灯を高く掲げて下さったのであります。

省みれば、智目なく、行足を欠く私共にしてみれば、真実の何処にあるやも知る力なく、よしんばここに在り、と聞かされても、そちらに微塵も近づき得ないで、唯闇の砂漠を右往左往し、生死の苦海を涯しなく漂流して行く身でありますが、釈尊とあらわれ、太子と示現して光明をとどけて下さる御恩を年々に深く知らされますことであります。

× × ×

近角先生の阿闍世王の懺悔は、先生が生涯を通じて信嘗して下さり、筆に言葉にくりかえしてお示しになったものであります。願わくばこれを見物人でなく実践者として身に受けさせて頂き、阿闍世の救いのままがわが救いであると味わわせて頂きましょう。

福島先生の二河白道の歩みは、先生の八十年の信の旅の表白であり、私共の信の旅へのよき伴侶となって下さるものであります。忽々とした歳末の三十日執筆下さったこともありがたく存じます。

一道会の記は、早く頂いておりました。榊原さんが私の病弱を気遣って下さってのお忙しさ押しての御執筆を謝しております。

木村さんの念仏詩抄は、念仏の旅に自然にこぼれ出た法味で、作ったものでなく、出来た念仏の言葉であります。俳人の友が嘗で「俳句は作るものでなく、いただくものです」と教えてくれたことがありますが、板画の棟方氏もだ「板に向うと絵が浮んでくる、そして刻まずにはいられなくなる」と語っておりますが、味いのある言葉であります。造花はどんなに立派に出来ていても、蝶も蜂も集りません。そこには蜜も香りもありませんから……。

昨年出版された「白色白光」の歌集は癩疾で全生園に居られる久保田明聖さんの苦心の結晶であります。東京都渋谷区代々木五の一の一七、短歌草原社の発行で定価五百円送料八十円であります。十八頁下段に、歌の一端を紹介しました。

慈光第二十四巻 第二号 昭和四十七年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜午後一時半。南区駈上町二の八八、一道会館、例会、市電、新郊通り一丁目下車。東入ル三筋目左入ル。

○ 毎月二十四日、午前午后。昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電御器所通り下車。市バス北山下車。

定価 半年 四〇〇円（送共）
一年 八〇〇円（送共）
編集・発行人 名古屋市南区駈上町二ノ八八 花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人 愛知県西加茂郡三好町大字福谷 吉野穂志郎
発行所 名古屋市南区駈上町二ノ八八 慈光社
振替口座 名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七